

ました。私は「いやいやそれは違います。僕は一番幸福者です。ご覧ください、このとおり体が健康です。また元気で働けば家も品物も手に入りますが、不幸にして戦死をされた本人も、ご家族の方々は一番気の毒ですよ」と話をいたしますと「まさにそのとおりですね」と喜んでくれました。人生の巡り合いほど不思議なものはありません。東京の人形町の永井印刷所の主人は、私の元の中隊長殿の家であり、話をいたしますと、婦人は「近所ですので奥さんとは良く顔見知りです」と申しております。

昭和二十三年午前七時三十分ころ、丸二年一カ月ぶりで東京駅に帰着をいたしました。そして各所を尋ねて家族と面会を致し、皆も元気で再出発を誓い合い、現在では三人娘と二人の孫達も成人をして、私も七十歳九カ月で、まだ元気で葛飾区のシルバー人材センターにおいて端役を務めております。家族全員元気で幸福です。

朝鮮歩兵

第四十九連隊補充隊

歩兵二十三部隊勤務歴

福岡県 上津原 猛

八十六歳を迎えた今になり、五十数年前になる私の二十七歳から三十歳までの軍隊生活を書きます。

昭和十(一九三五)年十二月一日、当時の徴兵検査の結果、私は背丈、体重が足りないことが大きな理由と思われる丙種で、国民兵役となっていた。

その後、日本は支那事変、大東亞戦争と戦局を広げていった。そんなある日、私は理髪店で散髪中、国民兵役の者も近々召集するというラジオのニュースを聞いて、戦局のただならないことを知ったのである。

昭和十七年十一月某日、私へ赤紙の召集令状が届いた。これは国民兵役召集の第一回目らしいことを知った。人選がどのようにして決定されるのか知らない

が、出発当日、瀬高の駅頭に顔を揃えた者は六人ほどで、未婚者が多いように思われた。

見送りの方々への挨拶をと思つていたところ、一番若く体格がよく、近眼鏡を掛けた者がいち早く元気な挨拶をしてくれた。この人は成清一郎君で後日戦死している。

我々の最初の入隊先は、福岡歩兵第四十六連隊（歩兵第一一三連隊）補充隊であった。入隊した直後、班の古年兵の話して、我々は朝鮮に送られることを知った。

福岡連隊での十日間ほどは、朝晩の点呼以外大した訓練もなかったが、私に困ったことが起きた。入隊のとき古い軍服と革の軍靴を支給されたが、兵営内の履物は縄緒の下駄であった。その下駄を素足で履いていたところ、すぐ足指の股の皮がむけてしまい、手当てをせずにいたところ朝鮮へ出発する頃はばい菌が入ってしまったようであった。

いよいよ朝鮮へ出発することになり、新しい軍服・軍靴が支給され福岡連隊を出発、下関に到着、下関港

を出発したのは昭和十七年十一月二十一日である。朝鮮海峡の荒波による船酔いに悩まされながらも、その日のうちに朝鮮の釜山に上陸した。ここでどのような人選であつたのか、私ほか三人は輸送指揮将校の伝令要員に指名され、一般兵が貨車に押し込められたのに反し、私たちはスチームの入った客車に乗せてもらった。三人は大蔵（大牟田、銀行員）、樋口（三潞郡、警官）、吉武（不明、農業）で皆しつかりした面がまゑと行動を見せた。後に樋口は白木の箱となり内地へ送られるのを見ることになるが、あとの二人のことは分からない。

伝令要員の私達は、時折りはげ山が続く南朝鮮の風物を列車の窓に張られた幕の隙間から見ではあきれたものである。スチームの熱気もあつてか、前に書いた足の傷がズキズキ痛み出し、右足の甲がだいぶ腫れてきたようであつた。京城師団のある龍山駅に着いたのは二十二日夜である。

ここで我々は伝令の役を解かれ、真暗闇の中、点呼もなく、命令のまま適当な四列縦隊となり、龍山歩兵

第七十九連隊の門内に吸い込まれた。闇に目が慣れると内地の兵營と違つたれんが造りの連隊本部があり、ほどなく明かりがつき、隊列の前方壇上から「ここは朝鮮第二十三部隊山根隊である。自分は山根大佐である」と連隊長の第一声があつた。次いで「五里の行軍に耐えられる者は三步前えー！」の号令があつた。私はちよつと迷つたが、現時点の足の状況では到底それは不可能と思ひ前になかつた。三步前に出た者は即時、野戦部隊要員となり、残りは補充隊に編入されたことを後で知つた。

入隊行事が長引く間に夜もだいぶ更けてしまい、列車のチームで暖まっていた私の体にも朝鮮の十一月の夜の寒気がひしひしと感じられるようになった。やがて、付近にいた新兵や私を、氏名も聞かず、まるで物のように人数を教え「よし付いて来い！」と「歩調取れ！」「歩調止め！」の号令の下に引率し、れんが造りの一列兵舎を通り抜け、二列目のれんが兵舎の入口に連れて行かれた。私はこの時、急に腹が痛み便意

を催した。そのことを引率の上等兵殿に告げ、教えられた便所に駆け込んだ。

慣れない兵隊食、とくに内地から朝鮮への移動中の食事、捨ててもできず、普段より多量に食べたのが腹にこたえたものと思われて、兵舎内の内務班に入つても二度、三度便所に走らねばならなかつた。私の思ひぬ体調異変で全員の揃うのが遅れ、引率係の上等兵に悪い印象を与えてしまった。その夜はそのまま就寝、翌日班付の岡田衛生兵の計らいで、腹、足の傷の診療を受け二、三日で治つた。

翌朝起床、点呼、食事のあと舎前に整列すると、一面深い雪で、いきなり零下十度と聞く。襦袢と冬の上衣の隙間がスースーする。雪の上を駆け足で昨夜の連隊本部の前に連れて行かれる。日が射し始めた連兵場には銃も剣も持たない新兵が体操をしているところであつた。ふと見ると、その中に福岡連隊で同班の堤松男と目が合った。一瞬のことである。堤松男は後日戦死している。

私の隊は朝鮮第二十三部隊（第七十九連隊）第六中

隊（高橋隊）第三班（麻田班長）。兵舎の二階奥の廊下を挟んだ二室が第三班で、各室二段装置になって、上下左右に寝台が置かれ、上段に登るには、左右各二つの立梯子が付いていた。

室の中央の机は兵器の手入れ台、食卓である。寝台は一列六人分、上下左右で二十四、廊下を挟んだ前後で四十八くらいだったと思う。各室の中央奥に暖房用のペーチカが燃えていた。また各室の廊下側に銃架があり、各兵に渡された菊花紋を刻された三八式歩兵銃がピカピカに光って並んでいた。

班長の麻田伍長は三十歳前後であろうか、おだやかな中に厳しいものがあり、班長の貫禄十二分である。先任宮島上等兵は割におとなしい人である。私のいる室のA上等兵が一番やかましく厳しい。教育係の三浦上等兵も厳しく、岡本一等兵は少し体も太っていて、おっとりしていて、上等兵にお任せといった態度である。後で分けられた軽機関銃班の教育は麻田班長、A上等兵が当たり、擲弾筒班は三浦上等兵、小銃班は宮

島上等兵の担当、そして麻田班長が総括、上に桑野教官がいて指揮に当たっていた。桑野教官は私に好意を持ってくれていたようであったが、麻田班長、ほかの上等兵は演習、内務班教育共なかなか厳しかった。

三班の国民兵はほとんど福岡県人であったが山門郡は私一人、筑後川の向こうという平田が一番近所の者で、平田は何で丙種だったのか、血色もよく大柄で親しみのある笑顔を見せてくれた。

機関銃班は、思い出すと大田、谷口など優秀で目立つ者と頑丈そうな者がおり、擲弾筒班には渡辺など、頭の良さそうな者、小銃班はその他である。

私の記憶に残っている同班の国民兵は元洋服屋、銀行員、会社員、社長の御曹司、農業等さまざまで、親しくしてくれる者、意地の悪い者などいろいろと四十人あまりいた。それが次々に野戦に送り出され、敗戦時第六中隊に残っていたのは私ともう一人、久留という炊事兵と二人であった。三班内務班の南側の内務教育はA上等兵が当たった。A上等兵は神経質で口うるさく、すぐ大声をあげ、新兵の我々は日々ビクビク過

ごした。

私は銃の手入れ器具の一つを手入れ終了後紛失したことがある。誰かが一緒に自分の袋の中に入れていたと思っただけで、その事の詮議はなく紛失したことを間抜けだと厳しく叱るのである。一度支給した物は二度とは支給しない、自分で工面して来いという。盗んで来いと言わんばかりである。

各部屋の掃除は朝は点呼後の食事前、夜は点呼前にする。一般家庭の掃除は、掃いた後で雑巾がけをするが、ここではまず寝台を整えた後、唐米袋の布状の粗い雑巾を水に漬けたもので雑巾がけをし、残りの荒ゴミを箒はらで掃くというやり方である。冬の朝鮮の水は冷たかった。すぐに霜焼けになり手当てする暇も時間もない。

兵営の入浴場は別棟にある。冬場、週に一度くらいの入浴は本当に嬉しかった。体も伸び伸びするし、別して指の霜焼け、あかぎれが和らぐのである。ところが入浴時間は短時間で次々に交代せねばならなかった。ある日入浴場で略帽を盗まれてしまった。上等兵

の叱言を思い出し、早速工面して帰って来た。悪い事をしたと思いつつながら。兵器の手入れ器具は、後で班内の一人が二つ持っているからと言って渡してくれた。

新兵生活の中で困ったのは歯を磨く時間さえないことである。起床から就寝まで、上等兵の声に追いまくられて、そんな事をしていたら、びんたで頬が歪むほど打たれるに決まっている。

第六中隊の兵舎は一階中央に石廊下があり、向かって左に事務室、中隊長室、将校室、右の方は兵器室、装具、被服室、第一班の室、二階は下士官、第二班、第三班の室になっていたと思う。

私の入隊した当時の将校の出身地は分らないが、古年次兵は九州の佐賀、長崎県出身の現役兵の中で、補充隊要員として残った者。国民兵教育の上等兵、一等兵は大阪方面出身者で占められていた。事務室の長の藤重准尉は山口県、佐藤上等兵は大阪の人で、ほかに眼鏡をかけ太った軍曹がいた。下士官の四、五人は、それぞれ兵器、被服装具の係、新兵教育係を担当

していたと思う。

入隊後しばらくして、近々野戦部隊の編成のため召集兵が入り兵舎が手狭となる。国民兵の補充兵はしばらく奥地の平康へ移動になるといふ。果たして数日後、平康へ移動。ここは龍山より高地の山間地で、厳寒の地であった。気温は零下二十度くらいが続き、初めて毛糸の防寒襦袢を着る事を許された。

山中の掘井戸はものすごく深く、滑車で汲み上げる太い縄は凍り、素手で握るならば手の皮がべったりと吸いつき離れないように、驚いて手袋をはめた。話に聞いた満州の寒気そのものようであった。厳しい寒気で演習はあまりなかったが、少し寒さが和らいだ時、付近の川に連れて行かれ洗濯があった。手足を浸しての水の冷たさは針が刺すように忘れられない。朝鮮の寒さは、九州育ちの我々は想像もしていなかったほどであった。

ある晩、非常呼集があり、まず中隊での勢揃い、大隊での整列、連隊としての集合に、立っている間の寒気に足踏みしてをしていたけれど足が棒のように感覚

を失ってしまった。それは私だけではなかったらしい。それから一時間あまり行軍があったが、左足はついに感覚が戻らず、兵舎に帰りペーチカの暖気でようやく元に戻ったようであった。

平康から龍山の兵営に帰ると、兵営はがらんとして人氣がなく、班内に一人野戦行きに洩れたというずんぐり太った笑顔の良い中尾二等兵（国民兵）がいた。中尾は第三班の我々の室に入ることにになり、後にラッパ兵となる。

帰隊して驚いた事の一つは便所である。小便が凍ってしまっているの、十字鍬で碎かねばならない。大便も鍾乳洞の石筍のようになっていた。また、鋌が打ちつけてある軍靴は凍りついた宮庭や演習場で滑りやすく、滑って銃を落とし損傷でもしたら大変である。我々は冷や汗の流れる思いで行動したものである。

長かった朝鮮の寒さが明け、第一期の検閲まで激しい演習が続いた後、一選抜の一等兵の進級があった。はた目には優秀と思われる者が一等兵に進まず、意外

な者が一等兵となったりした。妻子があると聞いていた大西が一番に一等兵となり、また上等兵になり、次に入隊した初年兵係に選ばれ、初年兵ともども戦地へ行ったのは後日のことである。私は昭和十八年八月一日に、三回目ぐらいで一等兵にしてもらった。

この頃、私は持病の脚氣ぢゃきがひどくなり、足が重く勤務、演習が苦痛で仕方なかった。編成替えて一班となり山本班長に申し出て、連隊医務室で受診の結果入院と決まり、京城陸軍病院へ入院、次いで連兵場分院に移り、ここで三カ月を過ごすことになる。

その後、装工兵となり、連隊の装工作業に携わっていた。そんな中で第二十三部隊は二度ほどビルマ戦線への補充出動があり、二度目は米海軍潜水艦の出没が激しいため出動取りやめとなり、下関から引き返して来たことがある。

次いで昭和十九年一月には近畿地方で編成されたと思われる歩兵第一五三連隊が兵営に入り、我々はこの連隊に編入され、新旧の兵員が混成で過ごすことになった。そしてまたここでも野戦部隊が編成されビル

マ方面へ出動した。この時、私も出動部隊の編成に名が挙がったけれど、翌日、誰かと変わっていたのは、今もって天佑と思うほかない。

その後、部隊は第二十三部隊（第七十九連隊補充隊）に戻り、事務室は元の藤重准尉、佐藤上等兵は兵長に進級していたように思う。私はその頃から、盛んに衛兵勤務についたようである。部隊の衛兵で一番きつかったのは真夏の衛兵である。一日中軍服を着ていなければならぬこと、門の立哨、休憩、控えの一時間あての三交代を繰り返す、夜は休憩の一時間は仮眠を許されませんが、眠りに就くまでと、交代前に起こされるのを差し引けば実際は一時間のうち、三十分眠れたら良い方であろう。翌日の衛兵下番は就寝が許されるが、汗の軍服、襦袢の手入れ、洗濯、兵器の手入れは絶対におろそかに出来ないの、眠ることが出来るのはよほど神経の図太い者だけであつたらう。夏の衛兵の後は食事が進まず、疲れが二、三日残るようであつた。

ここで思ったことは、将校の門の出入りに敬礼はか

りが厳しいため、本当にどこの隊の将校で、どこへ行くのか確認されないことが不思議でならなかった。特に夜はことさらに、にせの将校が易々と兵営に入るこゝとが出来、兵営を爆破されても仕方ない危険さえあることを思ったりしたものである。

部隊衛兵で一度、夏の軍旗衛兵に就いたことがある。夏の軍服を着け、風の通らない連隊旗を保管してある室の前の廊下の立哨である。点呼前の人の物音のある間はそうでもないが、その後の静けさと暑さについてとうとうとなりそうになる。動いてはならない、本当に眠い一時間である。ある時、思わずとろりと立ち眠りをした。その時コツコツ靴音がした。はっと目が覚めると、遇番士官が数歩前に近付いていた。とっさに捧げ銃の敬礼をして「異常ありません！」の報告が出来て事無きを得た。今思い出しても冷や汗ものである。この軍旗衛兵は一回だけの危ない経験であった。その他の衛兵勤務は、隣の第二十二部隊などと交代で受け持つ弾薬庫衛兵、陸軍倉庫衛兵、師団司令部衛兵、俘虜収容所衛兵、永登浦の弾薬庫衛兵等があり、

昭和十八年八月以降十九年八月頃までに、すべての勤務についた。中でも印象深いのは俘虜収容所衛兵である。

これは上等兵の歩哨係を長とする四人で、収容所の常勤の衛兵の援助に当たるのである。冬に入った頃で、昼は晴れであったが夕方から曇みぞれとなった。常勤の衛兵司令がやかましく、意地悪なことを言ったのには腹が立った。私達の時ばかりではなかったらしい。曇の夜の動哨で所内を回ると、囚体の大きい俘虜達は、暖炉を囲んでぬくぬくとして夜を過ごしているのである。一人でその中に入ったら、どうされるか分からないような、ひげづらの囚体の大きな俘虜たちの大きい目が、一齐にこちらを向いた。翌朝また巡回すると、大男達が屋外のトイレに並んで男の大きな一物を出し放尿しているのに出会ったりした。

永登浦は部隊からだいぶ離れた所であり、冬の三泊四日の弾薬庫の衛兵であった。食材を荷車に積み、炊事兵がついて来た。私は上等兵に進級していて、歩哨係を務めた。衛兵司令、衛舎係、歩哨兵の半数は他の

中隊兵で、混成の衛兵勤務であった。

衛兵所に着いて驚いたことは、衛兵控所の掃除が長らくされておらず、さすが板張り等に黒々と一面に積もり、腰掛けようにも腰掛けられない有様であった。

私は衛兵交代一時間あまりを使った控え所の大掃除を提案し、実行に移り、勤務交代前に掃除を完了し、気持よく休憩、食事が出来るようにして勤務に就いた。

昼は穏やかな日和に恵まれたが、夜に入ると寒気が厳しく、人里離れた所でもあり、弾薬庫前に立哨が一人、巡回する動哨が一人出ているので、本当は衛兵所の表戸は閉めたいところであるけれども、いつ何どき事件が起こるかもしれない。またいつ、巡察将校の巡察があるかもしれない。表戸を一枚開けて、一人の歩哨が常に目をみひらき、耳をそばだたせなければならぬ。ストーブを常にガンガン焚いているので、ストーブ側の体の半分は暖かいけれど、片一方は寒気が迫って来るのである。歩哨係は、寒気の中の歩哨の勤務も見回わなければならない。衛舎係と交代で夜のうちに二回は見回った。

歩哨は防寒具を着ているが、寒気の中じっとしてはおれず、絶えず体を動かして、一時間ずつの警戒勤務に耐えているようであった。将校の巡察は、一度私の巡回中の曉方であり、「敬礼！」の声が寒気の中に響き渡った。その時の勤務は大変良好ということで、連隊から、お褒めの言葉があった。第六中隊の兵士は皆優秀揃いで、特に杉田一等兵が私の記憶に残っている。

連隊の装工作業に携っていたことは前に書いたが、装工所長の助手の上等兵がやめ、私にそれをやるようにとの所長の内示があった。これも昭和十九年九月、上等兵に進級して間もないことである。私にそれが務まるかどうか迷ったが、是非やれと言われる。差し当たっての初年兵の教育であった。書物を読み、経験を整理し、第一日の教育を終わって中隊に帰った。ところが、中隊事務室から呼び出しがあり、明日から京城師団司令部に勤務を命ずると言われる。装工兵教育のことを言ったが、師団命令が先だと言われた。

師団司令部勤務―終戦

京城師団司令部の中の内容とは、京城師団の兵の中から「印章彫刻に冠する技術兵」を集め、京城師団司令部の中に「師団の印章の製作所を置く」という構想のようであった。

後日分かったことであるが、戦局の推移に備え、朝鮮半島を守る、新しい師団を作るため必要の「印」を作らせる。その事が軍以外に洩れないようにとの意図であったらしい。集まった兵は、奈良県出身の落合兵長を長に、内地出身は私とほか二人、朝鮮在住召集兵五人計九人で、早速印材、工具の調達、室造りがあり、各人の特技を生かす仕事の分担が定まった。朝鮮現地の召集兵は、五十歳を過ぎた兵もあり技術優秀、そのうえ特殊な技術を持った兵が三人いた。はじめ護師団の印、次に「光州」を冠せた師団の印を、毎日夜遅くまで作った。

一段落の後、朝鮮召集の兵は帰り、落合兵長共四人と木工兵一人を加えた五人で、追加の仕事に備え、京城師団の印も作った。室は京城師団、法務局の端の一

室で、法務室将校の下にあるような感じであった。時たま、法務局の雇員として勤務している三十歳ほどの朝鮮人が昼休みに話しに来ることがあった。彼は「我々は今、日本の国民にされているが、どんなに優秀でも、朝鮮人は一定以上の階級にはなれない、差別される」という不平を述べていた。師団司令部勤務中、落合兵長は伍長に、私は兵長に（二〇年八月一日）進級、責任の重さを感じる。

この頃、毎日の通勤が面倒になり、申し出で八月十日、師団司令部に転属。この頃、司令部に来て休憩中の輜重隊の初年兵に声を掛けたところ、同郷の与田二等兵であった（現在、健在）。

師団司令部から支給された寝具にも、虱シラミがたくさんいて寝られなかった。そして転属五日後、師団司令部において終戦の詔勅のラジオ放送を聞くことになる。司令部の将校、職員は割と平静に見え、司令部の二階からたくさんの書類を地上に下ろし、かねて掘られた穴で、それを焚く炎と煙がずっと上がった。

そんな中にも軍刀を振り回し悲憤慷慨の下士官もい

た。法務局の法務将校はめったに口を利いたことがなかったが、我々に「米軍が来たら絶対に俘虜になってはならない、自決せよ。そして女子（司令部の女子職員）は毒を服むように」と、毒物を包んで渡していた。女子職員は涙ぐみ、遂には声を上げて泣いたのである。

落合伍長が、我々は司令部の仕事は終わったのだから、元の部隊に帰るべきであると言ひ、あとの四人もこの言葉に従ひ、手続きを踏み、同室の五人はそれぞれ原隊へ、私は第二十三部隊に復帰したのである。

終戦より復員

京城師団司令部に通勤勤務中にも、中隊の兵は次第に変わっていったが、護朝師団等の編成に伴ひ、古くからいた兵隊はほとんどいなくなり、四国出身らしい一見農家のおじいさん風の老兵ばかりとなっていた。話し方も方言で田舎臭い雰囲気であった。そして、ほとんど銃も剣もなかった。後で支給された銃は、荒仕上げの銃身、粗削りの銃床で、役に立つのかと思うよ

うなものが五人に一丁、剣は鞘はなく、細長い鉄を劍の長さに切り、荒っぽく劍の形にして錆止めの塗料をかけたものがこれも二、三本支給されるといふ風で皆があきれ返るばかり、そんな中の終戦であった。

老兵達は残して来た家族をしきりに案じているようであった。ここでも下士官が夜、酒をのんだ揚げ句、軍刀を抜いて暴れるという事件があった。

帰隊した翌日頃、京城の鐘路方面が不穩のため、邦人の保護に各中隊から二人、本部前に出勤せよとの命があり、繩手上等兵と出勤、某少尉の指揮下に入り、鐘路に到着。宿舎の交渉がうまくゆかず、一晚はテントもなく外に寝ることになった。目を覚ましたところ、顔も服もびしょりと露に濡れていた。翌日は幼稚園らしき建物が宿舎となり、ここで二泊三日を過ごすことになる。

ここでは、昼間は交代で表通りに着剣の銃を持ち警戒、夜は邦人住宅の警戒のための巡回。少尉は京城の出身らしく、道路に詳しく暗闇をどんどん進む、特に闇が苦手な私はただそれについてゆくばかりであっ

た。闇の中に人影があり、同行の朝鮮出身兵は鮮語で誰何、なにやら二言三言荒っぽくやっていたが何事もなく放免するということもあつた。また深夜の闇に五、六人の影があり、一同銃剣を構えたが邦人であつたりした。

鐘路の不穩は一時的なものであつたらしい。その間、汗を洗い流すことも出来なかつた。中隊に帰ると時計のバンドの下は、汗疹が輪状に膿んでいて吃驚したものである。また、班に置いていた手箱がすっかり荒されていた。誰が盗つたのか詮議しても無駄と思ひ諦めた。私物は大事な物はなかつたが、連隊長の物だという象牙の印材を預かつていたのが紛失していた事が気に掛つた。終戦時の混乱と諦めていただくしかないと思つた。

その後、邦人の安全保護の出勤はなく、南鮮は米軍の進駐が定まつたらしく、米軍と接触しないように兵営を開け渡すことになつたらしい。一般兵は皆無事内地に帰れることを語り合つたものである。

私には入院があつたけれど、入隊以来二年十カ月の赤れんがの兵舎に別れを告げる日がついに来てしまつた。兵舎内外の清掃をして、ある程度の歩兵の装備を持ち、外套、毛布などの携行を許され出發することになった。我が班の老兵達はどこで見つけて来たのか人力の荷車を一台徴發して来て、それに一人に許される限りの物を積み、行ける所まで行く心組みのようであつた。

龍山を出て泊まりを重ねた終戦後の朝鮮在内の内地人は辛い思いをした人が多かつたらしい。農園経営者の一例であるが、朝鮮の傭人の待遇を良くしていたつもりであつたらしいが、農園を取り上げられてしまつた、などの話があり、軍隊が一日でも長くそこに駐在することを望むようであつた。

我々は一度だけ米軍兵と向かい合つた。横一列の日本兵の前に米兵が一人ずつ立ち、日本兵の私物を取りあげるのである。私の前に立つた米兵は割に小柄で、隠していた時計に気づかず、万年筆をとり、ニタリと笑つたのである。

部隊は内地帰還の乗船が定まるまで、一時期温陽という温泉地に駐留した。そこからまた転進した某地で、米軍に武器を渡し、いよいよ乗船地仁川港に向かうことに定まったらしい。

ここに在る間もなるべく人員を少なくし食糧を確保するため現地満期希望者を募り、一部の兵はそれに従った。ここで米軍への武器引き渡し要員として残る一人を上等兵以上の未婚者から選ぶと言われた。私も候補者にならなるところ、田中上等兵が飲酒事件を起こし、罰として残ることになった。

ここで哀れな話になるが、中隊長の乗馬の糧秣がなくなり馬を捨てねばならなくなったらしい。力なく首を垂れて立っている馬を哀れみながら部隊は仁川へ出発した。どこをどう歩いたか分からない、仁川港近くに着いたのは夜になった。夜食と日本の港へ着くまでの乾パン、米、缶詰などの食糧が支給され、さし当たり飯盒炊きさんとなった。薪などない場所であったが、兵隊が捨てた衣服、特に襦袢類が燃料となり、よく燃えた。

我が班の荷車ともお別れとなり、それぞれ荷を肩にして、米軍の誘導で大きな船腹に乗り込んだ（昭和二十年十月十一日出港）。それは米軍の上陸用の軍艦であった。船腹に一泊して翌朝甲板に上がるとおだやかな海に出ている。甲板には急造のトイレがあり、そこで用を足すことになった。飲料水は湖水から作るとかで、無味という味気ない水を十分に飲むことが出来た。

日本のどことも知らない港に着いたのは夜であった（昭和二十年十月十四日）。ここで着ているものを全部を脱がされ禪ぜん一つになった。消毒のためらしい。そのまま歩いて暗闇の山を越し、着いた建物に、我々の服が熱気消毒され、まだ湯気を立てていた。ここで一泊。召集解除は昭和二十年十月十五日。先に着いた港は佐世保の一部と見られる針尾の港で、乗車する鉄道の駅は、早岐駅であった。

兵営を出て以来一度も顔を見せなかった藤重准尉とここで会うことが出来た。准尉には何かと心に掛けて

いただいたものである。乗車が後になる藤重准尉と別れを惜しみ、見送ってもらった。鳥栖行き列車に何人かの兵が乗ったけれど次々に下車し、佐賀線に乗り換え、瀬高駅に降り立ったのは私一人であった。

昭和二十年十月十五日、二年十一カ月ぶりに故郷の土を踏むことが出来たのであった。